

大学生を対象とした発達障害に関する意識調査

A Survey of University Students about Developmental Disability

体育学部体育学科

佐々木史之

SASAKI Fumiyuki

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

要旨：本研究は、大学生を対象に発達障害について調査し、発達障害への認識度や発達障害を持った人への関わり方、インクルーシブ教育についてどのような考えがみられるかを明らかにし、今後の教育で必要となる要素を検討することを目的に行われた。調査の結果、発達障害を身近に感じた人が8割以上おり、約3/4の人が発達障害の人に肯定的に関わりたいと回答していた。また、インクルーシブ教育については半数強の人が肯定的な意見であることがわかった。しかし、過去の自分の経験から発達障害に対して偏った考えを持っていることが考えられ、様々な障害の症状や対処方法、個性や共生について理解を促す大学での教育が必要であることが検討された。

キーワード：発達障害、意識調査、大学生、インクルーシブ教育

I. 緒言

文部科学省（2012）の『通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査』では、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合は、推定値として6.5%を挙げている。経済協力開発機構（OECD）加盟国の中で1学級当たりの児童生徒数が多いとされる日本ではあるが、1学級33人程とした場合、2人の該当児童生徒が存在する計算になる。このような状況で、特別支援教育の必要性が高まり、児童生徒1人ひとりの教育的ニーズに応じて適切な教育的支援が行える教員の資質が求められている。

教員を養成する大学では、特別支援教育の内容を含んだ教職科目の授業が設定されており、その責務は大きいと考えられる。そこで、発達障害について、教職を希望する学生がどのような認識を持っているかを把握することは、授業を行う上で、また教員養成を成し得る上で重要になってくると捉えられる。

菊池（2011）は、教育学部学生における発達障害のイメージを研究し、発達障害児に対して統合教育を推進したり、そのための制度整備を進めたりすることに関しては賛成するものの、実際に自らが発達障害児と関わろうとすることについては消極的であることを示唆している。岡本ら（2012）は大学生を対象に発達障

害に関する理解と認識の調査を行い、回答の中にメディアで発達障害の知識を得るケースが多く、ドラマなどで脚色された偏った理解の仕方があることを危惧している。また、安藤ら（2020）は、教育支援専門職を目指す大学生を対象に、発達障害児に対する意識と支援者として発達障害児に関わった経験との関連をみる質問紙調査を行っている。この中で、実習等で発達障害のある子どもに関わった経験を持つ学生と、経験を持たない学生の間に有意な差はなかったことを報告している。しかし、男性よりも女性の方がインクルーシブ教育を肯定する傾向があることを述べている。

このように大学生を対象に発達障害に関する調査研究は多く行われているが、さらに実態を把握し、大学教育に活かす材料を得ることは意義深い。よって、本研究では、教職に関係する1科目を履修した大学生を対象に、発達障害への認識度や関わり方、インクルーシブ教育に対する考えを調査し、その後の教育で必要となる要素を検討することを目的に行うこととする。

II. 方法

1. 調査対象者

2020年度に特別支援教育の内容を含む教職科目を受講した大学生304名（男子217名、女子87名）であった。なお、内訳は1年生219名、2年生52名、3年生

19名、4年生14名であった。調査はオンラインで行われた授業の中で、趣旨を説明し、個人情報の開示はしないことを約束した後、Googleフォームで回答を求めた。回答をもって同意とした。

2. 調査期日

2020年7月中旬

3. 調査内容

調査項目は以下の7問であった。

- (1)「あなたは発達障害について今までに意識したことはありますか？」
- (2)「あなたの身の回りの人で発達障害を感じたことはありますか？」
- (3)「あなたが発達障害の人と関わるようになったとき、どのように感じますか？」
- (4)「あなたが発達障害の人と関わる時に何が大変だと思いますか？」
- (5)「発達障害の人と健常者が一緒に学ぶことをどう思いますか？」
- (6)「1つ前の質問の理由を教えてください」
- (7)「あなたは発達障害の人とどのように関わりたいと思いますか？」

(1)～(2)は「はい」「いいえ」「どちらともいえない」の3件法、(3)は「全く抵抗はない」「あまり抵抗はない」「どちらともいえない」「少し抵抗がある」「かなり抵抗がある」の5件法、(5)は「賛成」「やや賛成」「どちらともいえない」「やや反対」「反対」の5件法、(7)は「積極的に関わりたい」「普通に関わりたい」「どちらともいえない」「あまり関わりたいくない」「関わりたいくない」の5件法、(4)と(6)は自由記述で回答を求めた。得られた回答については単純集計を行い、自由記述は内容をまとめ、検討した。

Ⅲ. 結果および考察

1. 発達障害の意識

図1は、「あなたは発達障害について今までに意識したことはありますか？」の回答結果である。「ある」と回答した人は52%、「ない」と回答した人は22%、「どちらともいえない」と回答した人は26%であった。約半数の人がこれまでに発達障害を意識したことがあることがわかる。さらに、「あなたの身の回りの人で発達障害を感じたことはありますか？」の質問では、

86%の人が「ある」と回答している(図2)。このことから、これまでの学校生活等で身近に発達障害と思われる生徒と接してきたことが考えられる。

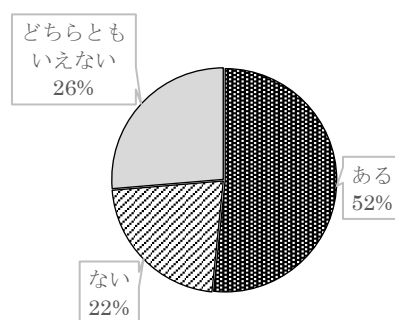


図1 発達障害を意識したこと

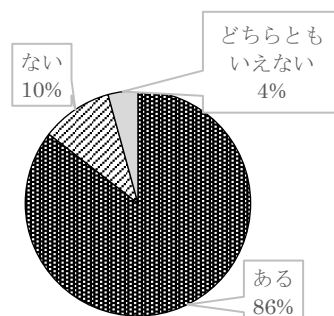


図2 発達障害を身近で感じたこと

2. 発達障害の人との関わり

- (1)「あなたが発達障害の人と関わるようになったとき、どのように感じますか？」について

この回答では、「全く抵抗はない」は16%、「あまり抵抗はない」が37%で、約半数の人が肯定的な意見であった(図3)。「少し抵抗がある」が24%、「かなり抵抗がある」はわずか1%であった。この回答結果からも、回答者は発達障害の人と身近であまり抵抗なく関わってきた人が多かったのではないかと考えられる。

- (2)「あなたは発達障害の人とどのように関わりたいと思いますか？」について

回答結果を図4に示した。「積極的に関わりたい」が12%、「普通に関わりたい」が61%、「どちらともいえない」が26%、「あまり関わりたいくない」が1%、「関わりたいくない」は0%であった。全体の3/4近くの人が関わりに抵抗なく肯定的なことがわかる。特に意識することなく普通に関わりたいと思っている人が多いところ、否定的に思っている人がほとんどいないところが特徴といえる。

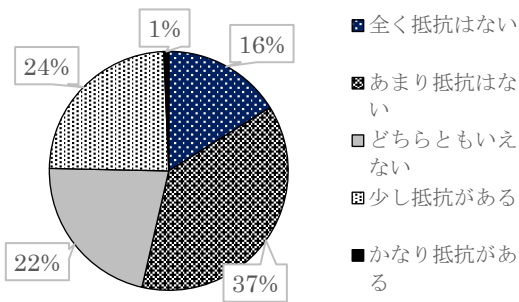


図3 発達障害をどのように感じるか

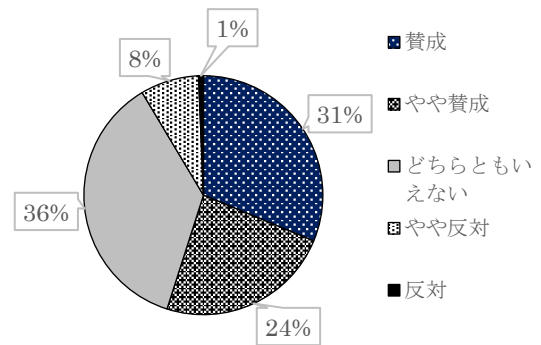


図5 インクルーシブ教育をどう思うか

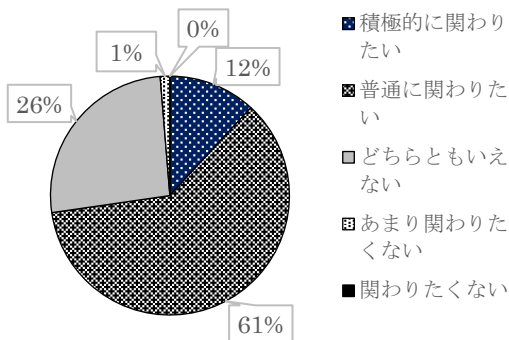


図4 発達障害の人との関わり

(2) 「発達障害の人と健常者が一緒に学ぶことをどう思いますか?の理由(自由記述)」について

賛成・やや賛成意見では「同じ人間だから」、「差別をしたくないから」、「一緒に学ぶことで、お互いを理解し合えるから」等があった。反対・やや反対意見では「いじめが起こると思うから」、「授業についていけないと思うから」、「周りに危害を加える攻撃的な人もいるから」等がみられた。発達障害がある人のことを思って、その人が苦にならないように配慮する優しい意見もあった。これらの回答も症状の違いによって捉え方が違っていることが考えられる。

(3) 「あなたが発達障害の人と関わるときに何が大変だと思いますか?(自由記述)」について

この質問では、「その人を理解すること」、「コミュニケーションの取り方」、「対応の仕方」等の回答が多くみられた。中には「大声をいきなり出されること」や、「急に暴れたりして止めるのが大変」、「その人が理解するのに時間がかかること」、「同じことを何度も教えるのが大変だと思う」等の具体的な表現もあった。また、「付きっきりじゃないとだめなところ」といった症状の重い人を想定した内容も含まれていた。人それぞれ、様々な症状があり、発達障害と一言ではなかなか表現しづらい質問であったと考えられる。

3. インクルーシブ教育

(1) 「発達障害の人と健常者が一緒に学ぶことをどう思いますか?」について

回答結果を図5に示した。「賛成」が31%、「やや賛成」が24%、「どちらともいえない」が36%、「やや反対」が8%、「反対」が1%であった。「賛成」「やや賛成」の肯定的意見が半数強であったが、「どちらともいえない」が多く、インクルーシブ教育の考え方はまだまだ浸透していないことが考えられる。

4. 教育で必要となること

調査結果から推測されることは、回答者自身の経験から身近にいた発達障害と思われる人の影響が大きいということである。発達障害という言葉で思いつく過去の経験だけに固執することなく、様々な障害や症状があり、人によってその程度も違うことを授業の中で伝えることが必要である。

また、発達障害や発達障害と思われる人でも社会で活躍している人が多くいることや、誰でも多少の症状があり得ることを伝え、人間は皆、得意不得意があるように、個性として捉える考え方や、お互いを理解しようとする態度を育て、共生という考え方を広めることが大切であると考えられる。また、それぞれの障害で必要になってくる対処方法について理解を得られるようにすることや、一人ひとりのニーズを理解し、現場で工夫して教育的支援が行われるようにする大切さを伝えることが必要である。

IV. 今後の展望

今回の調査では、性別でみると、男子が約7割であり、学年別でみると1年生が約7割であった。比率に

むらがあったため、性別、学年別で比較することはしなかった。サンプル数をさらに増やし、性別、学年別での検討も望まれる。また、自由記述回答の分析をさらに検討することが今後の課題としてあげられる。

引用・参考文献

安藤久美子・安藤直樹 (2020), 教育支援専門職を目指す大学生の発達障害児に対する意識－支援経験との関連－, 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 5, pp.77-82.

菊池哲平 (2011), 教育学部学生における発達障害のイメージ－接触経験・知識との関連－, 千葉大学教育学部研究紀要54, pp.15-23.

村上理絵・吉利宗久・津島靖子 (2020), 大学生における発達障害に対する基本的知識と合理的配慮への意識に関する予備的検討, 広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要18, pp.83-90.

村上理絵・若松昭彦・氏間和仁・林田真志・谷本忠明・吉利宗久 (2018), 知的障害および発達障害に対する大学生のイメージおよび意識の変化－教育学部生を対象とした授業のアンケート分析から－, 広島大学大学院教育学研究科紀要67, pp.91-97.

文部科学省 (2012), 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf 2020.8.30.閲覧

岡本百合・三宅典恵・仙谷倫子 [他] (2012), 発達障害に関する理解と認識－大学生意識調査－, 総合保健科学 28, pp. 1 - 8.

安田純・中西峻樹 (2014), 大学生の発達障害に対する知識と意識, 美作大学紀要59, pp. 1 - 5.